

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | ソウル大学言語学科便り 〈便り〉 |
| Author(s) | HB生, ; 藤本, 幸夫 |
| Citation | 広大言語 , 7 : 77 - 81 |
| Issue Date | 1967-12-18 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046283 |
| Right | |
| Relation | |



ギリシアが漸に迫って来ます。

今日のギリシアについては、日本人の間での評判は必ずしもよくありません。変なボン引きが
いるとか、食事がまずいとか、大声で話すとか、油断ならないとか……しかし私がここで一ヶ月
余り経験したがギリシアでは、不快な思いというものはい度もなかったと言ってよいと思います。ホ
テルの従業員をはじめ、町の商人、大学の先生たち、すべて昔ながらの客もてなしのよい人々で
す。殊にギリシア語で（片言ではありますが）話しかけると、たちまち表情が変わり、笑顔を見せ
てくれます。数日前、同じ宿に泊り合せた千葉工業大学の先生（西欧を廻って来た人）もやはり
同じ感想を述べ、西欧の人たちは何か冷いところがあるが、ギリシア人は付き合い易いと言っ
ていました。ギリシアの悪口を言う人は悪いボン引きにでもひっかかった連中だろうなどと話し合
ったことです。なお日本商品の広告はあちこちに見られ、日本商品と日本人の評判は大変いいよ
うです。有能、勤勉な同胞に感謝したい——祖国を離れてみて今さらながらそんな感があります。

私は明日イタリアへたちます。これ以上書いていた時間がなくなりましたので、ここで一まず
打ち切り、別の機会にギリシアのことをもっと詳しく書きたいと思います。西欧へ行って、私の上
述のギリシア観がどのように変わるか変わらないか、これは私自身にとっても興味ある点です。

（10月6日 アテネにて）

ソウル大学言語学科便り

今春、京都大学の言語学科博士課程に入学、直ちにSeoul大学の言語学科に三年間の計画で
留学された藤本幸夫氏から、同大学の言語学科について、詳細な紹介文がとどいた。わが国では
あまり知られていない、かの地の言語学の様子を知るために、よい機会と思われたので、氏の許
しを得て、ここに載せていただくことにする。（全文ほとんど原文のままである）

H B 生

ソウル大学言語学科についてお知らせします。まず大学をのべます。

① ソウル大学校は1947年に前京城大学から新しく発足しました。丁度10月15日で20
周年を迎え、今いろいろな行事が行われています。ソウル大学校は11個単科大学（文理科大学、
法科大学、工科大学、医科大学、農科大学、商科大学、歯科大学、師範大学、音楽大学、美術大

学、薬学大学、各々離れて存在します)と5個の大学院、学生数1万3千名、専任講師以上教授陣7百名以上、事務員約千名、年間予算約8億(日本円に換算すれば×1.4で11.2億となりますが、日本円より価値があります)。15の研究所、看護学科、2個の病院、中学高校、小学校まで付属しています。その外に図書館、博物館、大学新聞社、大学出版社、演習村をもっています。国立大学は各道(日本の県にあたる)に1つつつあり、従って9国大があります。その中でもソウル大学は全国から秀才が集まるところです。従って国民のソウル大に対する評価も高く、学界、政界、実業界の重要な位置を占るのはソウル大出身者に多いです。

② 言語学科は上記の文理科大学に属します。

文理大は文学部と理学部、医科予科、歯医科予科を含みます。文学部には、国語国文学科、中国語中国文学科、英語英文学科、独語独文学科、仏語仏文学科、言語学科、史学科(東洋・西洋を含む)、社会学科、社会事業学科、哲学科、宗教学科、心理学科、政治学科、外文学科、美学科、地理学科、考古人類学科があり、理学部には、数学科、物理学科、化学科、植物学科、動物学科、地質学科、天文気象学科があります。2医科予科と歯科予科は医科大学、歯科大学の進む前、二年間教養と専門の基礎知識を学びます。

③ 言語学科教授について

教授の地位は正教授、副教授、助教授、専任講師、時間講師となっており、その下に助教(日本の助手、ほとんど大学院学生が兼ね、無給です)

| | | |
|-----------|------|------------|
| 許 雄 | 副教授 | 言語学、韓国語学専攻 |
| 金 芳 漢 | 助教授 | " アルタイ語学専攻 |
| 愼 翼 晟 | " | " 印欧語専攻 |
| 朴 亨 達 | 専任講師 | " ロシア語専攻 |
| 他に時間講師 4名 | | |

④ 授業科目について

1. 1年向 露 語 初級より 週3時間
2. " 言語学概論 副教授の著書により 週3時間
3. " 言語学語読 週3時間

Hughes: Scientific linguistics

4. 2年向 音韻論 副教授の著書による 週3時間
5. " 言語学史 週3時間

Rehman: Perspectives of Linguistics

6. 2年向 言語学講読 週3時間
Paul:Prinzipien der Sprachwissenschaft
7. " 羅典語 初級から 週3時間
8. " 満州語 プリントにて //
9. 3年向 文法原論 //
Bernard Bloch and Geörge.L.Trager:Outline of
Linguistic analysis.
10. " 言語学講読 週3時間
Saussure:Course de linguistique générale.
11. " ギリシア語 School Greek Grammar. 週3時間
12. " 高級露語 週3時間
13. " 言語学特講 //
Martinet:Élements de linguistique générale
14. 4年向 言語学演習 授業はなし。論文提出のみ
15. " 言語学特講 週3時間
Perderson:Discovery of Language
16. " 印欧語学概説 週3時間
Pauza:Géographic linguistique (?題名, とうですか?)

⑤ 学生について

大学入学の時から、言語科へ入り、教養科目と平行して専門科目も学びます。高校で、才2外国語として、独、仏、中語をおしえていますから(独語がほとんど)大学入学と同時に相当の実力をもっています。特に言語学を勉強しようと思って入ってくるものはほとんどいないようです。1学年に10名の定員でいま、学部で40名ほどいます。英、独、国語学を専門とするものがほとんどで、特殊語を専攻するものはいません。というのは、言語学科は当ソウル大学にのみあり、外にはありません。又、特殊語を勉強しても就職も出来ませんから、就職しやすい英、独等という事になります。(高校の先生) 韓国では大変な就職難で一流会社では4,5人募集になんと、400, 500人が応募ということがざらです。でもソウル大出身はなんとかなるそうでほぼ100%に近いようです。当科の出身は高校中学の先生、言論界に就職します。

⑥ 単位について

一年は2学期に分れています。才1学期(3月1日から7月中旬まで)才2学期(9月1日か

ら12月中旬まで)

1週1時間1学期間の授業を1学点とします。(学点=単位)卒業に必要な単位は、160学点以上で、その内、教養科目は、44学点以上、専攻科目は84学点以上となっています。

⑦ 大学院

大学院へ進むのは毎年1人ぐらいです。言語学科は名目上教授業はあることになっていますが、実際は何もなく、教授からSaussureを精読しろとかいわれるだけです。学生はほとんど学校へ出てきません。というのは高校の先生になったり、アルバイトをしたりしているからです。時々立寄って指示をうけています。今3名にて、国語学専攻(元来は独語専攻)、英語学専攻、仏語学専攻です。

もちろん他学科の大学院は授業がありギュギュシほられています。尚、当科には、博士コースはなく、碩士コース(二修士)のみです。

⑧ 軍隊

すべて男子は20才になると体格けんさをうけます。そして入隊が義務づけられます。但し大学在学者はすぐにゆかなくとも卒業して入隊してもよいということになっています。期間は2年半~3年です。在学中に休学してすましてくるものや、卒業すると同時に行くもの、いろいろです。もし行かなければ(いつかは一度行かねばなりません)就職も出来ず、(募集要項にほとんどの場合兵役修了者という但書が入っています)外国留学も出来ません。折角べんきょうしても入隊し三年後帰って来るとみんな忘れているということになり、これが学問の大きい阻止になっています。又、R.O.T.C (Reserve Officers' Training Corps) というのがあり、在学中に軍事訓練をうけます。(これは希望者のみ)校庭でよく隊伍を組んで歩いているのみかけます。これをすますと、職業軍人最下位の少尉になれます。そうすると軍隊へ行っても、2年と期間が少し短く、号令をかけたることが出来ます。今、当科40名中、8名入隊しています。

以上で大体のようすおわかりのことと思います。最後に、今20周年を迎えた学校新聞にのっている記事を紹介しします。

あるソウル大学校総長のことばとして(但し3年前の言葉です)「大学を出て大学院を出て米国へ行き、Ph.Dをとってこようとすれば多年かかります。そのようになって、ここへ帰ってくると何になるかといひますと、専任講師です。専任講師の初任給がいくらかと言えば8,200ウ

オン程度です。税金をとれば7,000ウオン程度になります。例えば7,000ウオンをもらう教授が勉強をするといえはそれはうそです。このごろ7,000ウオンをもっては、洋書を2さつ買えばそれだけです。米を買い金もないでしょう。こんな状態では勉強できる道理がありません。そして勉強をしない。そうすれば、学生へ何も与えるものはありません。そうすると、学生は先生をおおきみて「あれは勉強もしない先生」というでしょう。先生の悪口をいう学生を先生が好むはずがありません。このようになると、先生がいても先生が目につらず、学生がいても学生が目につらない人間喪失の状態——これがまさしく大学の危機ということです。」

先生の冷遇、これが問題では、時間講師、国立大では1時間240ウオン、私立大300～400ウオン。かけもちで月40時間講師をしても（こうなると自分の勉強不可能）よくて、1,600ウオン、1人で生活しても15,000～2,000ウオンはいます。まして家族があればどうなりますか。みんなどんなに生活しているのやら不思議でたまりません。

言語教育体験雑記

宮本邦彦

卒業以来早くも7ヶ月の月日が過ぎてしまいました。私は四月以来、母校の広島学院中・高等学校に勤務して居ります。毎日の授業や、放課後はとても楽しく、時の経つのも忘れてしまいうです。毎週月曜日の職員会議だけは退屈で、「そんな事を一つ一つ相談しなくても、早く校長が決めてしまえば良いのに」などと、しょっちゅうボヤいています。

忙しいのをいい事に、このところ、勉強らしい勉強はほとんどしていません。全く恥づかしい次です。しかし、時々、社会科の先生に、シュメール語、サンスクリットなどに関して、いろいろと尋ねられることがあり、そのたびに、ノートやテキストを読み返したり、「もっと勉強しなければ……」と反省している有様です。しかし、言語学を専攻して良かったと思う事もしばしばあります。そして、その事を一人ひそかに誇りに思っています。

いつかの授業で、生徒が、It rains という表現に関して「It rains やIt is fine today などの文では、訳しもしない（日本語では用いない）のに、It がなぜ要るのですか」という意味の質問をしました。そこで、在学中に毎週悩まされていた“Havers”の“Syntax”に出ていた“Zeùs ùeì”の一節を思い出し(S.) 解り易く説明してや